



ワシーリー・グロスマンと「自由」：後期ソヴィエト文学を通して見た運命と意思に関する一考察（一）

渋谷，謙次郎

(Citation)

神戸法學雑誌, 69(1):1-33

(Issue Date)

2019-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011834>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011834>



神戸法学雑誌第六十九巻第一号二〇一九年六月

ワシーリー・グロスマンと「自由」 ——後期ソヴィエト文学を通してみた 運命と意思に関する一考察——（一）

渋谷 謙次郎

スターリングラードでの勝利は戦争の帰趨を決定づけた。しかし、勝利した国民と勝利した国家のあいだの声なき闘いは続いていた。この闘いには、人間の運命、人間の自由が⁽¹⁾かかっていた。——グロスマン『人生と運命』——

-
- (1) Василий Гроссман. За правое дело, Жизнь и судьба. Москва, Эксмо, 2013. С.1227. ワシーリー・グロスマン（齋藤紘一訳）『人生と運命3』（みすず書房、2012年）、75頁。本稿で、グロスマンの主著『人生と運命』の原文の出所を示す場合、上記のモスクワ、Эксмо社から2013年に出た『正義の事業』と『人生と運命』の両作品が納められた一巻本を用いる（以後、Гроссман. Жизнь и судьбаなどと略記する）。参照した邦訳は、2012年に出た上記の齋藤紘一訳『人生と運命』（三分冊）である。なお、グロスマンが『人生と運命』の原稿を当時のソ連の出版社に持ち込んだのは1960年だが、その後、国家保安委員会の家宅捜索によって原稿は没収されてしまった。しかし原稿の写し、マイクロフィルムが1970年代にひそかに西側に持ち出され、スイスのローザンヌで出版されたのは1980年になってからであった。ソ連国内で公表されたのはペレストロイカ時代の1988年であった。これらの経緯の概略については、齋藤紘一訳『人生と運命1』巻末のМ.スミルノワの解説を参照。

目次

1. スターリングラード・トレ布林カ・ルビャンカ：場所的表象の諸問題
2. グロスマン：無党派ポリシェヴィーク？
3. スターリングラードと「自由」：クルイモフとグレーコフの場合
4. ルビャンカにて：元チェキストとの対話

(以上、本号)

5. トレ布林カから「医師団陰謀事件」へ：反ユダヤ主義の帰趨
6. 「自由」の喪失と恩寵：ヴィクトルの場合
7. 『万物は流転する』：ロシア革命と自由
8. グロスマンと「自由」の精神現象学

1. スターリングラード・トレ布林カ・ルビャンカ：場所的表象の諸問題

本稿は、狭義の文学研究、テキスト研究ではなく、テキストはあくまでも素材であり、作家で従軍記者でもあったグロスマン（1905-1964年⁽²⁾）の第二次大

-
- (2) ワシーリー・グロスマン（関連邦訳文献では「グロースマン」という表記になっている場合もあり、引用の際は基本的にそれぞれの表記に従う）は、ゴーリキーやショーロホフ、パステルナーク、ブルガーコフ、ソルジェニーツィンといったソヴィエト文学の大御所達と比べて、ロシア文学がさかんだった日本においても、翻訳が限られていたこともあって、知名度はそれほど高くはなかったが、彼ら大御所に優るとも劣らない壮大なスケールを持ったウクライナ出身のソヴィエトの作家である。日本では、近時相次いでみずす書房からグロスマンの主要な作品の邦訳や新訳も出され、再評価されている。グロスマンの伝記を兼ねた作家論としては注目すべきは、以下である。Ю.Г. Бит-Юнан, Д.М. Фельдман. Василий Гроссман: в зеркале литературных интриг / Василий Гроссман: литературная биография в историко-политическом контексте. «ФОРУМ М», 2015. John Garrard and Carol Garrard, *The life and Fate of Vasily Grossman* (Pen & Sword Military, 2012).

戦後の諸作品を通じて、そこに現れる「自由」をめぐる論議を再発掘しようという、ささやかな任務を遂行するに過ぎない⁽³⁾。

従来、グロスマンの諸作品との関連で「自由」について触れられることが散発的にあったとしても、それはどちらかというと彼自身が第二次大戦後に強めていったとされる全体主義（ナチズム、スターリン主義）批判という文脈であろう。それは巨視的には間違っていないだろうが、かつてのソ連の作家や知識人が外敵のナチズムのみならず、ある意味ナチズム以上に全体主義的な身内のスターリン主義を告発していったとなると、後々そのことが——東西冷戦の帰趨もあって——西側の自由民主主義の価値の優越といった問題にすり替えられてしまいかねなかった（そうでなくても“ソ連共産主義の崩壊をいち早く予言した”という紋切型のレッテルに落ち着くなど）。あいにく、グロスマンのテキストからは、そうした西側的な価値の優越をうかがわせるような箇所は見いだせない。ましてや、グロスマンにおいて、自由とは、現代のドクサとして先進国を中心に凱行進を繰り広げてきたような市場バイアスの自由（商品やサービスを選択する自由、資本移動の自由、あるいは財産権のような物象

-
- (3) 副題に掲げている後期ソヴィエト文学という括り方は、一般に確立されている語法とまでは言えないが、ロシア文学に多少なりとも通じている場合、ポスト・スターリン時代のソヴィエト文学のことではないか、という直感が働くかもしれない。それではば問題は無いが、大まかには第二次大戦後、より正確には1953年のスターリン死去と1956年のいわゆるスターリン批判の流れの中での人々の意識の変化や過去の見方の変化などが、あるいは他ならぬ作家自身の考え方の変化などが、反映されていった文学の総体としておく。その場合、作品の対象が革命や内戦時代であったり、スターリン時代であったり、「大祖国戦争」（第二次大戦のロシアでの呼び名）であったりする場合も、後期ソヴィエト文学となり得る。またグロスマンもそうだが、同一作家の中である時期を境に後期ソヴィエト文学への移行がみられ、しばしば当局からの発禁の憂き目にあっていた。
- (4) ただし近時、グロスマンが作家としていかに自由を行使しようとしたかという視点からの注目すべき英語の論文集が出ており、別途、検討対象とすべきと思われる。Edited by Anna Bonala and Giovanni Maddalena, *Vasily Grossman: A Writer's Freedom* (McGill-Queen's University Press, 2018)。

化された権利に付随する自由など）とは相当、次元を異にしており、さしあたりは集団的な社会解放の希求という側面がある。そこでは人々は恒常的に国家の暴力にさらされているなど、基本的に運命の支配下にあるが、反面、単になけなしの良心の自由を内心に確保しているというのみならず、戦争などの非常事態、例外状態の到来をきっかけに、総力戦を遂行し得るような国家の動員の意図とは別に、人々の間で、束の間とはいえ、共同性だとか連帯の機運が立ち上がり、諸個人の意思を通してではあるが、様々な「自由」の発現や志向、葛藤がみられる、ということでもある（それは必ずしも戦争のみならず国家の崩壊や大規模な天災、エコロジカルなカタストロフィーなどを通してもあり得る話でもあり⁽⁵⁾、その意味では現代の私達にとっても全く無縁とは言い切れない話である）。

ただし、それらも「本当の自由」だとか「真の自由」といったレトリックで昇華してしまうことは憚れるのであり、そもそもグロスマンの中でも自由に関する視点は相当、振幅がある。ましてやグロスマンの晩期の『万物は流転する』の中に姿を現すロシア革命と自由に関する叙述は、小説という形をとってはいるものの、文明論のような様相を呈している。そこでは、さながらドストエフスキーの「大審問官」の問題が再来しているかのようでもあり、ニコライ・ベルジャーエフが看破した「二律背反的に両極端に対立する主義をいっしょくたにする」ロシア的気質への洞察、「ロシアとロシア民族とはまことに矛盾撞着によってのみ特徴づけられる…（中略）ロシア国民は、国家的専制とともに無政府的な自由を愛する民族⁽⁶⁾」という視点が現前している。

あいにくグロスマンのいう「自由」を消極的自由だとか積極的自由という風

(5) 例えば、Rebecca Solnit, *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster* (Viking Adult, 2009). 邦訳レベッカ・ソルニット（高月園子訳）『災害ユートピア』（亜紀書房、2010年）。

(6) Н.А.Бердяев. Истоки и смысл русского коммунизма. YMCA Press, paris 1955. С.15. ベルジャーエフ（田中西二郎、新谷敬三郎訳）「ロシア共産主義の歴史と意味」、『ベルジャーエフ著作集7』（白水社、1960年）、23-24頁。

に教義化することはできないだろうが、彼のテキストを通して現れる「抑圧されたものの回帰⁽⁷⁾」としての「自由」は、いわゆる「自由論」とは異なるものの、スターリングラード、トレブリンカ、ルビャンカといった極限的な場所的表象と分かちがたく結びついて展開される「自由」の精神現象学としてみることも可能である（それは例えば自由民主主義体制だから「自由権」が保障されているといった問題とは位相が異なる）。

グロスマンが第二次大戦中に従軍記者として赴任したスターリングラード（現ヴォルゴグラード）は、大戦中の犠牲者の数でいえば最も過酷な市街戦が行われた地として知られる（推定死者数は独ソ両軍で約200万人、一般人約20万人）。他方でグロスマンは、戦後の大作『人生と運命』において、かつてスターリンの「大テロル」でソヴィエト社会が陥った茫然自失状態を打開する何かを、「大祖国戦争」（第二次大戦のロシアでの呼び名）におけるスターリングラードで展開する労農赤軍兵士や政治将校らを通して表現しており、そこには戦後のユートピア的期待さえもが再現されている。多大な人的、物的被害をもたらす

-
- (7) 「抑圧されたものの回帰」という視点が個人および集団レベルで現れるのが、フロイトの『トーテムとタブー』や『モーセと一神教』である（個人レベルでいうと、例えば父親ないし母親に反発して自我を形成した子が、後に、自分が父親や母親になる段階で、かつて否定ないし抑圧したはずの父親や母親の性格そっくりになることなど）。個人レベルでの「抑圧されたものの回帰」が集団あるいは「集合的無意識」についても類推可能なのか、「実証的」見地からは議論もあろうが、フロイトは次のように述べている。「問題となっているのは民族生活のなかで過ぎ去ってしまったもの、忘却されたもの、克服されたものだが、われわれはこれを個々人の心的生活における抑圧されたものと敢えて同列に置く。この過ぎ去ったものが、その暗黒時代のなかでいかなる心理学的形態をとって存在し続けていたのか、われわれはいまのところ言い表すすべを知らない。個人心理学の概念を集団の心理学に転移することが容易になったわけではないし、「集合的」無意識なる概念を導入したとしても何か得るところがあるとは思われない。実際のところ無意識の内容はそもそもが集合的なであり、人類の普遍的な共有財産なのである。それゆえわれわれは類推の論理を用いることで当座の間に合わせにする。」ジークムント・フロイト（渡辺哲夫訳）『モーセと一神教』（ちくま書店、2003年）220-221頁。

戦争という過酷な現実が、他方で再び自由を希求するための共同性再建の契機ともなっていたという両義性が出てくる。

トレ布林カ（現ポーランド領）は、やはりソ連の従軍記者としてドイツ軍敗退時にグロスマンがたどり着いたナチスの「絶滅収容所」（1942年7月－1943年10月）の跡地であり、彼のルポタージュ「トレ布林カの地獄」は、ニュルンベルク裁判において、ユダヤ人虐殺の証拠として提出されたほどである。⁽⁸⁾トレ布林カの極限の表象は、グロスマンの『システィーナの聖母』という、ラファエロの絵画に由来する不思議なテキストの中にも現れているが、そこでも彼は改めて運命と自由について問いかけている。グロスマン自身、ユダヤ系の出自を有しており——ワシーリー・セミョーノヴィッチというロシア風の彼の名・父称は、元々ヨシフ・ソロモノヴィッチだった——ただし彼は、反ユダヤ主義の病理を単にナチズムという外敵に帰したのみならず、「医師団陰謀事件」⁽⁹⁾にみられるような、戦争終結後の晩期スターリン体制において猛威をふるった反ユダヤ主義にも直面し、そのことが第二次大戦後の彼の諸作品の重要なモチーフのひとつとなっている（例えば反ユダヤ主義を内心嫌悪しつつも、同調圧力の中で、そこから「自由」であることがいかに難しいかといった問題）。

ルビャンカは、連邦内務人民委員部（戦後は国家保安委員会）の本部があったモスクワ中心部の地であり、スターリンの「大テロル」の時期には、連日、大量の被逮捕者が連行され尋問された恐怖の象徴として知られ、ここに設置された特別会議は「社会的危険人物」に最長10年までの流刑の処分を下して

(8) Гроссман В.С. Треблинский ад. Москва, «Воениздат», 1945. 赤尾光春・中村唯史訳『ワシーリー・グロスマン前期作品集：トレ布林カの地獄』（みすず書房、2017年）12-60頁。

(9) スターリン晩期の1952年に、クレムリンの病院に勤務するユダヤ系の医師達がスターリンを始めとする高官の命を縮めようとしたテロリストであるという嫌疑で次々と逮捕され、それらは「シオニスト」の陰謀でユダヤ人の国際的組織「ジョイント」のエージェントであるとされた事件。スターリン死去の翌月、ベリヤの指示で手続が中止された。

⁽¹⁰⁾いた。グロスマンはトレ布林カにおけるナチスの蛮行に戦慄し、内外に知らしめたのみならず、翻って、ソ連における反ユダヤ主義と同様、自らの問題として「ルビャンカ」にも内向せざるを得なかった（『人生と運命』の主要登場人物のひとり、スターリングラードに赴任した政治将校のクルイモフは後に「ルビャンカ」の住人となる）。

このように、スターリングラードもトレ布林カもルビャンカも、人間性が徹底的に貶められるか、抹殺されるかした地であったが、例えばサルトルが、『沈黙の共和国』の中で「われわれはドイツの占領下にあったときほど、自由であったことはなかった・・・全能の警察がわれわれを強制して沈黙させようとしていたが故に、どのことばも、一つの信条の宣言のごとく貴重になった。われわれは追いつめられていたが故に、われわれの⁽¹¹⁾挙動はどれもアンガージュマンの重みをもっていた」と逆説的に述べたことを思い起こせば、これらの場所的表象において、自由の問題が問われること自体は、不思議ではない。また、ついでにいえば、グロスマンにとって、ナチズムもスターリン主義も、20世紀に吹き荒れた全体主義の二大巨悪として等価ということになっていったのではないか、という平板な解釈も成立し得るが、グロスマンは、ナチズムもスターリン主義も同じ穴の貉だと他人事のように済ませてしまったわけではない。そもそも彼自身、ソ連の従軍記者として愛国主義の先兵であったのであり、その意味ではスターリン主義の共同体の一員でもあったのである。むろん、グ

-
- (10) 連邦内務人民委員部の特別会議は、1934年の設置当初、5年以下の流刑、追放処分などを科すことができた。しかし、1937年以降、5年の上限は8年に、そして間もなく10年まで延ばされた。内務人民委員部特別会議は、一回の会議で数百、数千の事件に即決の「判断」を下すことがあり、1930年代末から、全政治犯の約半数（約500万～600万人）は特別会議の「判決」によって受刑した。なお、帝政ロシア時代にも「内務省特別会議」という組織があり、政治犯などに流刑（いわゆる行政流刑）の処分を下していた。1956年に廃止される。
- (11) Jean-Paul Sartre, “La République du silence”, Les Lettres françaises, 9 septembre 1944, n° 20, in Situations III, Gallimard, 1949. 『サルトル全集』11巻（人文書院、1953年）、86頁（白井健三郎訳）。

ロスマンもまた、戦後のポスト・スターリン時代にあつては、他の知識人達と同様、過去のスターリン体制には懐疑的になっていくものの、単に過去と訣別したのとは違う。彼の諸作品を通して見えてくるのは、いわば、多くの人々が内なるスターリンを持っていたということでもある。そしてスターリン時代を何とか生き抜くために「人民の敵」の糾弾集会に参加し、署名し、時には密告ささえてしまう人々も、他方、逮捕されラーゲリ（収容所）を渡り歩いて、20年、30年経って、スターリン死去後に出所してきた人々も、両者の間にみられる溝は埋めがたいものの、ある意味で、グロスマン的な視点では、いずれも運命の共同体の一員である。

おそらく「後期ソヴィエト文学」の中で比較的よく知られているのは、スターリン時代を奇跡的に生き延びた作家のイリヤ・エレンブルクによって、スターリンの死去翌年に発表された『雪どけ』⁽¹²⁾であろう。エレンブルクは、かつてスターリン時代に人が逮捕されるかどうかは、ほとんどくじ引のようなものだったと述べたが、これは「人民の敵」の烙印を押されることが、確率的な問題ということにもなる。

グロスマンは、エレンブルクとも親交が深かったが、グロスマン的な主体と

-
- (12) Илья Эренбург. Оттепель. Собрание сочинений/ Илья Эренбург (ред. И. Чеховская), т. 6. Москва: Изд-во «Художественная литература», 1965. エレンブルク（小笠原豊樹訳）「雪どけ」、『世界文学全集』Ⅲ-19（河出書房）。イリヤ・エレンブルク（1891-1967年）は、革命前に15歳でボリシェヴィキの地下活動に参加し、中学を退学処分となっているが、その後、フランスなどの欧州暮らしが長く、文化や芸術面でパリが精神的故郷といつてよかった。念願のソ連帰国を果たした後も、なじめず、精神的には国内亡命者であり、スターリン時代にあつて、外国との接点は致命的でもあり、エレンブルクが逮捕されなかったのは奇跡とも言われる。しかし、ユダヤ系の彼はナチス・ドイツを憎悪し、戦時中は赤軍の対独プロパガンダに熱心であるなど、ある意味で愛国主義の急先鋒であったことが幸いしたとも言える（ただし当時は完璧なスターリン主義者、愛国主義者であっても逮捕されることは頻繁にあったので——「人民の敵」であることをカモフラージュしているとか仮面をつけているという嫌疑で——必ずしもそのことは逮捕を免れる必要十分条件ではなかった）。

は、何か自己決定し得るような主体ではなく——権利の主体ではなく——ほとんどくじ引き的にトレ布林カやルビャンカに送られる、運命の客体である。例えば『人生と運命』に出てくる軍医のソフィア・オーシボヴナ・レヴィントンは、ドイツ占領下のウクライナで、今や「移送列車」に乗せられているが、「人々に起きた最も大きな変化は、自らのかけがえのなさや個性という意識が弱まり、運命という意識が強まり大きくなったことであった」と自覚する⁽¹³⁾。古代人であればギリシャ悲劇のように運命の前に立ち尽くし、近代人であれば個性や自己決定を強く意識する（自己原因的である）という単純な話でもないようである（現にグローバル資本主義の下では自己決定や自己責任が強調される一方、かつてないくらいに運命や不可抗力が強く意識されるという二律背反状況を私達は目の当たりにしている）。

このように、グロスマンにおいては、「自由」とは運命の圧倒的支配と生存のくじ引き状況に向かい合って何を思い、考えたのかということに関わってもくるが、そのコアについて、彼は『システィーナの聖母』などでも「人間の中にある人間的なもの（человеческое в человеке）」と呼んでいると思われる⁽¹⁴⁾。こうした言い回しは、一見とらえどころがないものの、必ずしも人道性や人権といった聞き慣れたヒューマニズムにとらわれることなく、考えてみるに値するだろう。

2. グロスマン：無党派ボリシェヴィーク？

グロスマンの作家としてのデビューは1930年代の盛期社会主義リアリズムの時代に遡るが、後に彼が作家として名をはせたのは、やはりソ連軍の従軍記者としての活動ゆえであろう。従軍記者としてのグロスマンにスポットを浴び

(13) Гроссман. Жизнь и судьба. С.837. 齋藤訳『人生と運命1』287頁。

(14) Сикстинская мадонна, Гроссман В.С. Несколько печальных дней, Москва, «Современник», 1989. 齋藤絃一訳『システィーナの聖母：ワシーリー・グロスマン後期作品集』（みすず書房、2015年）

た画期的な著書といえるアントニー・ビーヴァーとリューバ・ヴィノグラードヴァ編の『赤軍記者グロスマン』⁽¹⁵⁾も触れているように、グロスマンは「大祖国戦争」時のドイツ占領下ウクライナにおける、自らの出身地でもあるベルディーシェフでのユダヤ人虐殺事件（グロスマンの母親も殺害されていた）や、トレ布林カ「絶滅収容所」の実態などをいち早く取材していた。

ドイツ軍のソ連侵攻に際して、かつて農業集団化で大量餓死者が出るなど辛酸をなめたウクライナ農民の間では、ドイツ軍の到来を歓迎する向きもあり、なおかつドイツ占領下のウクライナにおけるユダヤ人の迫害や虐殺では、地元のウクライナ人も加担していた。当然、こうした経緯は、ソヴィエト当局にとっても都合の悪いものであり、グロスマンの取材や記事は、当局の警戒対象ともなった。ナチス・ドイツの蛮行を白日の下にさらすことが「ファシズムからの解放者」ソ連の使命でもあったはずだが、実情は勸善懲悪では済まされなかった。しかもソ連の公式的立場では、ドイツ占領下でのソ連民衆の犠牲者は、「民族を問わなかった」のであり、ユダヤ系市民にこそさらスポットを当てて犠牲者、被害者として描くことはタブーであった⁽¹⁶⁾。

ソ連では、ナチズムと異なって、イデオロギー上、反ユダヤ主義はあつてはならないこととされ、スターリン自身の庇護の下にあったユダヤ人のインテリや芸術家、党幹部もいた。しかし、他方でスターリン自身がユダヤ人嫌いでもあったとされ、帝政ロシア時代以来の民衆の反ユダヤ主義感情も根強く、戦後の冤罪事件である「医師団陰謀事件」や「反コスモポリタニズムキャンペーン」にみられるように、暗殺の被害妄想にかられる晩年のスターリン自身がしかけ

(15) Edited and translated by Anthony Beevor and Luba Vinogradova, *A Writer at War: Vasily Grossman with the Red Army 1941-1945* (PIMLICO, 2006). アントニー・ビーヴァー、リューバ・ヴィノグラードヴァ編（川上洸訳）『赤軍記者グロスマン：独ソ戦取材ノート1941-45』（白水社、2007年）

(16) *Ibid.*, p.256. 同上382頁によれば、「グロスマンの記事『ベルギーChefにおけるユダヤ人殺戮』はソヴィエト当局の検閲で削除・修正されたが、検閲の眼目のひとつはユダヤ人の犠牲をあまり強調しないようにすること、もうひとつはウクライナ人の残虐行為加担の度合いをあいまいにすることだった。」

た反ユダヤ主義キャンペーンが戦争終結後にうごめいていた。皮肉なことに、晩期スターリン体制における反ユダヤ主義は、ナチス・ドイツを壊滅させ、ソ連のユダヤ人知識人が米国などのユダヤ人と連帯して反ファシズムの声を挙げたことによって、激高したのである。かくして、戦後、グロスマンは、ソヴィエト体制内部の反ユダヤ主義にも向き合うことになり、彼の戦後の諸作品においても、スターリン晩年の反ユダヤ主義的キャンペーンに積極的でないにしても（保身のためであれ）消極的に加担する科学者などの心の揺れが、ひとつのモチーフとなっているのである。

スターリン死去後、グロスマンは、その従軍記者としての功績からも、かつてスターリンの側近のひとりであったヴォロシーロフ（国防人民委員、ソ連邦元帥を歴任）から入党を勧められるが固辞し、ヴォロシーロフから好意的に「君は無党派ボリシェヴィーク」と言われたとされている。党と一体化できない「無党派ボリシェヴィーク」とは、彼の微妙な立ち位置をあらわしているだろう。非黨員作家のグロスマンは、「大祖国戦争」の従軍記者として活躍しつつも、戦後のスターリン晩期における反ユダヤ主義や復活したロシア・ナショナリズムはもとより、あらゆる支配的潮流には一体化できずにいたのである。

ただ、ソルジェニーツィンのように、「収容所文学」がもとで国家反逆の廉で逮捕され、国外追放された作家であれば、ソ連共産主義に対峙していた当時の西側諸国にとっても、「自由」の擁護に際して利用価値があっただろうが、その点、グロスマンは、西側でも知名度があまり高くなかったこともあって、ある種のわかりにくさがつきまとった。1980年代にグロスマンの作品が西側で出版されるようになった後、ほどなくしてソ連はペレストロイカ時代に突入しグロスマンの諸作品もロシア国内で陽の目をみるが、かといって彼を週及的にソ連の「異論派」のように位置付けるのも正確ではないだろう。

とはいえグロスマンは作家としては、フルシチョフ時代はむしろ不遇であった。彼は、1961年に家宅捜索にやってきたソ連国家保安委員会に大量の原稿

(17) Beevor and Vinogradova, *A Writer at War*, p.349. 川上訳、511頁。

を没収され、翌年、グロスマンを引見した共産党のイデオロギー畑のボスのスースロフは、『人生と運命』の原稿について＜本書の出版は共産主義、ソヴィエト権力およびソヴィエト人民に対して害悪となるだろう＞、＜二百年、三百年後であれば出版可能かもしれない＞などと告げる。⁽¹⁸⁾ スースロフの予想に反して、ロシア国内で陽の目をみるまでに、その十分の一くらいの年数で済んでいるが。

グロスマンの諸作品のうち、もっともスケールの大きい『人生と運命』は、「大祖国戦争」後半期の一大叙事詩であり、実在した軍人や指導者などを交えつつ、一見無関係にみえる複数のプロットが同時進行する（ドイツ占領下の捕虜収容所、スターリングラードの攻防、科学者の家族、ソ連の収容所、ユダヤ人の移送列車や「絶滅収容所」など）。異なった場と空間に登場する主要人物達は、実は、「シャーポシニコフ家」と何らかの関係を有していることがわかるが、こうした関係性も、『人生と運命』の前作（前編）にあたる『正義の事業』⁽¹⁹⁾（未邦訳）を読まないといわかりづらい。

『正義の事業』は、スターリンが死去した後の1953年秋にソ連国内で出版されており、その過程で数々の改変が要求されたと言われる。⁽²⁰⁾ それに比べると、『人生と運命』については、グロスマン本人というよりは、その原稿が国家保安委員会によって「逮捕」されてしまったのであり、『正義の事業』と『人生と運命』との間には、内容面で「認識論的断絶」のようなものがあるのか、あるいは単に『正義の事業』の国内出版に際して、書けなかったことを、後のスターリン批判の波に乗って『人生と運命』執筆過程で書いたのか、議論の余地はあろう。本稿は、これらの作品自体の紹介や分析を目的としたものではない

-
- (18) Ю.Г. Бит-Юнан, Д.М. Фельдман. Василий Гроссман: литературная биография в историко-политическом контексте. «ФОРУМ», 2015, С.140. 同様な趣旨のことは、齋藤紘一訳『人生と運命1』の巻末のМ・スミルノワの解説でも触れられている（515頁）。
- (19) ただし、齋藤紘一訳『人生と運命3』425-434頁で、訳者の齋藤氏が『正義の事業』の概略を示していて、粗筋を把握することができる。
- (20) 齋藤紘一訳『人生と運命1』、М・スミルノワの解説（510-511頁）。

が、スケールと扱っている問題の広さからいえば、ロシア文学史の流れでいうと、トルストイ『戦争と平和』に匹敵するものであり——ただし『戦争と平和』の舞台となっているナポレオン戦争の時、トルストイはまだ生まれていなかったが、『人生と運命』の舞台となっている「大祖国戦争」ではグロスマンは従軍記者として最前線にいた——いわゆる「全体小説」だろう。

『人生と運命』（斎藤紘一訳）第一部で訳出されているM.スミルノワの解説によれば、グロスマンは、かつて「社会主義リアリズム」の作家であり、また戦時中には「炎のような愛国心によって貫かれて」いたが、その後、「グロスマンの世界観は大きく変化する。敵と味方の境界線は洗い流されていく。⁽²¹⁾」そして、『人生と運命』は、「小説には戦闘そのものを描く場面がこれといてない」のであり、「作家は《かき消されてしまっている》声なき声に耳を傾ける。⁽²²⁾」

かつてソ連の言語学者ミハイル・バフチンが、「ポリフォニー」という概念を使って、ドストエフスキーの作品の特徴を、作者のモノローグとしてではなく登場人物の多様な声の交差に求め、⁽²³⁾そうした見地が日本の文芸理論家の間でも一時期注目されていたが、『人生と運命』にみられるのは、スミルノワの言っている「声なき声」のポリフォニーであるだろう。理想郷を描いた「社会主義リアリズム」という臆見とは裏腹に、『人生と運命』全体に通底しているのは、運命と葛藤、死への直面であり、このような作品が生み出されたことは、「事件」といっても過言ではないであろう。はからずも、共産党のイデオロギー畑の後見人スースロフが、「二、三百年」、本書を禁書扱いしようとしたことが、そのことを物語っている。

(21) 同上、505-506頁。

(22) 同上、520頁。

(23) И.М.Бахтин. Проблемы творчества Достоевского. Москва, «Алкоголь», 1994.

3. スターリングラードと「自由」：クルイモフとグレーコフの場合

グロスマンは『人生と運命』の主要な舞台となる「大祖国戦争」時のスターリングラードについて、時折、美的とさえいえる描写をしている。

スターリングラードでの兵士たちの態度は申し分なかった。多くの血が流されたこの粘土質の斜面には、平等と尊厳があった。

戦後のコルホーズ体制がどうなるのか、偉大な人民と政府の関係はどうなるのかが、スターリングラードでのほぼ共通した関心事項であった。赤軍兵士の戦闘の毎日と、シャベル、ジャガイモの皮をむくナイフ、あるいは大隊の靴職人が使う革修理用ナイフを用いる彼らの労働——すべてが国民や他国民、および諸国家の戦後の生活と直接結びついているように思えた。

戦争においては善が勝利し、自分の血を流すことを惜しまなかった誠実な人々が楽しくまっとうに暮らせるようになると、ほぼ全員が信じていた。自分自身は平和の時代までに生き延びるのはほぼ不可能だろうと考え、毎日、その日の朝から夕方まで生きていられたのは不思議だと思っていた人々が、この心しみる信念を口にしていた。⁽²⁴⁾

兵士や職人の活動、労働が、すべてにおいて「直接結びついているように思え」る、という物象化を免れているかのような世界もさることながら——資本主義社会であれば個々の労働は商品という形態を通じて結びつく⁽²⁵⁾——その

(24) Гроссман. Жизнь и судьба. С.865. 齋藤訳『人生と運命1』338-339頁。

(25) 旧社会主義世界の文学が興味深いのは、それが単に体制礼賛的なのか（暗に）批判的なのかという単純な政治的読解にとどまらずに、人々の社会的関係の取り結び方が、商品貨幣経済のもとで生きる私たちとどのように異なってくるのかということを想像可能にさせるからでもある。その場合、ジェルジ・ルカーチがマルクスから引き出してきた、資本主義社会の解剖のキーワードとしての「物象化」（人と人との社会的関係が、商品や貨幣といった幻影的なモノ＝「物象」どうしの関係となって立ち現れる）という概念は、ひとつの手がかり

日、生き延びられるかどうか定かでない運命のもとに人々や兵士がまるごと置かれ、にもかかわらずユートピア的ともいえる自由や集団的解放への希求が強い。こうした部分が直接、当局の逆鱗に触れているとは考えにくい、グロスマンの戦後の作品が当局を刺激したのは、従軍記者としての彼の経緯もあるにせよ、彼の諸作品において、戦前の過酷な農業集団化や「1937年」などの暗い過去への言及があるからのみならず、ともすると革命初期の時代のあった共産党とソヴィエトとの二重権力化が想起されるからでもあろう（「ソヴィエト権力」という呼称は、偽称でもあるが一種の無意識の欲望でもある⁽²⁶⁾）。グロス

となるであろう（例えば「市場経済」というのは多様な財・サービスが価格を伴って行き交っているかのような世界であり、その意味で物象化された世界である）。ただし、それは社会主義社会では「物象化」が後退し理想郷が現れるという単純な意味ではない。むしろ人々の対立や葛藤はより生々しいものとなる可能性もある。例えば、資本主義社会では、（全てではないが）たいていのことは金銭で解決可能とすると、社会主義社会でそうではないとするならば、人々の関係はどうなるであろうか。

- (26) 「二重権力」というと、通常、それは1917年のロマノフ王朝崩壊後の、いわゆるブルジョア臨時政府とソヴィエトとの競合であり、十月革命で終止符が打たれたかのように見えたが、それは（臨時労農政府と憲法制定会議との二重権力化の危機を経て）今度はソヴィエトと共産党との二重権力化に転移した。それは、1921年のクロンシュタットの反乱でも再現されている。当時の「プロレタリアート独裁の憲法」では、いかなる条文にも党という文言は出てこない——初期のソヴィエト憲法で規定されているソヴィエト権力機構に党は「現前」しない——が、歴史の知るところによると、内線終結後のネップ（新経済政策）という後退戦を強いられつつも、他方では、憲法上のソヴィエト統治機構図に対して党の事実上の優越的支配が確立されていった。「党」が、はじめて憲法に顔を現したのが、1936年憲法、いわゆるスターリン憲法であり、全連邦共産党（ボリシェヴィキ）以外の政党が事実上死滅しているソヴィエト社会で、スターリン自身が、憲法起草過程で共産党の役割を書き込んだとされている。すなわち、社会团体（団結の権利）に関する条項において、党があらゆる社会团体の「前衛」であり、指導的中核である、とまるで事実命題のように語られていた。1936年憲法は、社会主義の勝利をうたったとされているが、それは同時に党の勝利でもある。しかし、同時期に荒れ狂った「大粛清」——粛清とは、元来は、出世目当てなどの不真面目な党員の党籍見直しなどを意味

マンの中でそのことが明確に意識化されているわけでないにしても、である。

グロスマンのテキストを通じて顔を出す自由への希求とは、数々の場所的表象が告げているような環境（市街戦の人海戦術、ドイツ占領下の絶滅収容所、ソ連のラーゲリや「ルビャンカ」）において、運命の支配下に置かれる人々の中に瞬くものであり、絶望と希望とが激しく交差する中でのことである。むろん、それはく過酷な環境でも人は良心の自由という聖域を失わなかった>といった美談で終わってしまいかねないが、重要なのは、そうした環境が、人々を偶然にも結び付け、「自由」の再定義を推し進めるということである。それは時には、第一次世界大戦の下での閉塞感や苦境がロシア革命のような形で噴出することもあるが、1930年代にスターリンの大テロルによって党から古参ボリシェヴィキが根こそぎ一掃されていったように、ソ連史においてロシア革命のような出来事はいったん「抑圧」されて、ソ連体制は、いわば血を抜かれたゾンビのようになっている。⁽²⁷⁾にもかかわらず、血を完全に抜けきれなかったのか、あるいは遺伝子に組み込まれていったのか、グロスマンのテキストに

していた——によって、直前期の1934年の党大会の代議員の6割近くが、そして中央委員会メンバーの約8割が逮捕・銃殺されており、1939年の党大会では、革命前からの党員がほとんど姿を消してしまった。党の勝利とは、「党の自壊」でもあった。ちなみに「党の自壊」とは次の書名からのものである。Arch Getty and Oleg Naumov, *The Road to Terror: Stalin and the Self-Destruction of the Bolsheviks, 1932-1939* (Yale University Press, 1999). 邦訳アーチ・ゲッティ、オレーグ・ナウモフ編（川上洸、萩原直訳）『ソ連極秘資料集、大粛清への道：スターリンとボリシェヴィキの自壊1932-1939』（大月書店、2001年）

- (27) このことについて、グロスマンは、次のように述べている。「革命という生身の体から皮膚がむかれつつあった。新しい時代はその皮膚で自らを着飾りたいと思っていた。一方、血まみれのなま肉、湯気をたてるプロレタリア革命の内臓は、ゴミ捨て場に運ばれつつあった。新しい時代はそれらを必要としていなかった。必要なのは革命の外皮であり、生きた人間からその外皮をはぎとっていたのである。革命の外皮をかぶった者が革命の言葉で語り、革命の身ぶりを繰り返していたが、彼らは違う脳、違う肺、肝臓、目を持っていた。」Гроссман. Жизнь и судьба. С. 1381. 齋藤訳『人生と運命3』369-370頁。

出てくるように、スターリングラードの表象にみられるような平時ではない例外状態の場合は、ロシア革命のような「抑圧されたもの」は再び回帰してくる。

前述した編著者アントニー・ビーヴァーとリュースバ・ヴィノグラードヴァは次のように述べている。

多くの理想家と同様、グロスマンもスターリングラードで発揮された赤軍のヒロイズムが戦争を勝利にみちびくだけでなく、ソヴィエト社会を永久に変化させるだろうと熱烈に信じていた。団結をかためた人民がナチスにたいする勝利をかちとったあかつきには、NKVDも、粛清も、グラーク〔収容所システム〕も、歴史的遺物としてほうむり去られるにちがいないと信じていた。いつ死ぬかわからないのだから言いたいことはなにを言ってもかまわないという解放感から、前線将兵は農業集団化の災厄を、ノメンクラトゥーラ〔特権幹部層〕の傲慢さやソヴィエト宣伝の目にあまる虚偽を、公然と批判した。のちにグロスマンはこれを『人生と運命』のなかで政治将校〔いわゆるコミサール〕クルイモフの心境をつうじて描き出した。⁽²⁸⁾

戦争（総力戦）遂行にあたっては、確かに「党派性」は障害になることが考えられよう。そのことが、後述の通り、コミサールのクルイモフ（ニコライ・グリゴリエヴィチ）に独特な意識をもたらしている。グロスマン自身も、ビーヴァーとヴィノグラードヴァが言及しているように、NKVD（連邦内務人民委員部）やグラークなきソヴィエトというユートピアを共有したというのが、それが結果的に幻想であったとしても、そこには、グロスマン自身が、従軍記者としてスターリングラードで出会った人々と共有していたものがあり、それは『人生と運命』の個々の人物の意識となって表れているとみなすことができるだろう（グロスマンの意識は特定の登場人物のみに集約的に表れているというよりは複数の人物に分岐してあらわれると考えるのが妥当であろう）。

(28) Beevor and Vinogradova, *A Writer at War*, Introduction, xv. 川上訳、25頁。

『人生と運命』に登場するコミサールのクルイモフは、まさに党から派遣されてきたわけだが、彼は、このスターリングラードという非日常的例外状態で意識にゆらぎが生じているのである。

クルイモフにはスターリングラードに来た当初から、なにか奇妙な感じがしてならなかった。

党のない王国に来たような感じがしたり、反対に、革命初期の空気を呼吸しているような感じがしたりした。

クルイモフはいきなり質問した。

「あなたは党に入って長いのですか、同志中佐」

「どうのことですか、同志大隊コミサール、私が党の路線を踏み外しているように見えるのですか」

クルイモフはすぐには答えず、師団指揮官に言った。

「私は自分をそこそこの党の講話者と思っているのです。労働者の大きな政治集会で講話をしてきました。ですが、ここではずっと、指導されているのは私で、私が指導しているのではないという感じがするのです。大変に奇妙なことです。そうです。自分の考えを貫く人間が、自分の考えに縛られているのです。私は狙撃兵たちの会話に口を挟み、訂正を一つしたくなりました。だが、そのあとで考えました——学者に教えるなんて、その学者をダメにすることだと……。本当のことを言えば、黙っていたのはそれだけが理由ではありません。政治指導本部は、赤軍が復讐者の軍隊であることを兵士に自覚させるようにと講話者に指示しています。それなのに、私はここでは国際主義と階級的アプローチの話始めてしまいそうになるのです。重要なのは、敵に対する大衆の怒りを動員することだというのに！ 私がそんなことをしたら、結婚式にやってきて、死者の魂の安息のための説教をはじめた話に出てくるばかりと同じになってしまいます……」

さらにしばらく考えてから口にした。

「そう、これは習性なんです……党はふつう、大衆の怒り、激しい怒り

を動員して、敵をやっつけ殲滅することを狙います。キリスト教のヒューマニズムは、われわれの仕事に約に立ちません。わがソヴィエトのヒューマニズムは容赦ないものなのです……もったいぶったやり方はわれわれにはどうでもいいのです……」

クルイモフはちょっと考えていた。

「当然のことですが、必要がないのにあなたがあやうく銃殺されかけたあのケースを念頭においているのではありません……1937年には、仲間の人間たちを殺すようなことが起きました。つまり、それらがこのつらい事態を招いたのです。でも、労働者と農民の祖国に侵入してきたのはドイツ軍ですからね！ 戦争は戦争です！ 彼らには当然の報いです」

クルイモフはバチュークの答えを待った。しかし、バチュークは黙っていた。クルイモフの言葉に当惑したからではなかった。寝入ってしまったのであった。⁽²⁹⁾

ここでは、本来、軍内部や将校、兵士たちの思想的動揺や乱れに規律を与えるために派遣されてきたコミサールのクルイモフ自身が、空回りをしていることがわかる。さしあたり彼の思考様式は「古参」（古参ポリシェヴィキ）のそれであり革命の申し子である。しかも「国際主義と階級的アプローチ」といった、「大祖国戦争」当時としては場違いな、へたをしたらトロツキストとして逮捕されかねないことを言っているクルイモフは、「1937年には、仲間の人間たちを殺すようなことが起きた」と回想している。⁽³⁰⁾ 当時の言説では「1937年」に殺されたのは、「人民の敵」ではなかったか。コミサールのクルイモフは、暗に「1937年」の禍根をにおわせており、スターリン主義には同一化できていないのである。

クルイモフは、スターリングラードの赤軍兵士を前に「戦闘の仕方を、同志

(29) Гроссман. Жизнь и судьба. С.869-870. 齋藤訳『人生と運命1』347-348頁。

(30) Там же, С.870. 同上、348頁。

諸君、あなたたちに教える必要はない。そうしたことはあなたたち自身が誰にでも教えることができる。しかし、なのに、なぜ司令部は私をここに送る必要があると考えたのか。なぜ私はこうしてあなたたちのところにやってきたのか」と述べる。すると兵士の誰かが笑いながら「スープのためじゃないか」と揶揄する。クルイモフは、怒りで頬を紅潮させながら、「これは反乱なのか、コミサールの話など聞きたくないのか」と自問自答を始める。しかし「おそらく、聞き手のこの陽気さにはなんら造反的なものはなく、たんにスターリングラードに横溢している本質的にみんな平等だという感覚から生じたものなのだろう」とも考え直すのである。このことから、クルイモフの意識は揺れていることがわかる。

スターリングラードに横溢しているという「本質的にみんな平等だという感覚」、これも1917年の「二重権力」時代の再来である。ロマノフ王朝崩壊後、部隊単位でソヴィエトに代議員を派遣していた兵士の間で、旧来の軍隊内部での階級制度が覆されつつあった。⁽³¹⁾ 末端の兵士達は、ソヴィエトの指揮系統に従っていた。ロシア革命の申し子であり、古参のクルイモフがその精神を知らないわけがなく、「本質的にみんな平等だという感覚」も、そうした精神をスターリングラードに展開している部隊に投影した感覚だとも言える。ただし、同時に「この感覚」が、クルイモフの精神を攪乱し、彼の中で兵士たちへの敵

(31) Там же, С.1034. 齋藤諒『人生と運命2』168-169頁。

(32) 和田春樹の近著『ロシア革命：ペトログラード1917年2月』（作品社、2018年）は、副題の通り、主として帝政の崩壊した二月革命を克明に追ったものであり、二月革命は反戦・反軍の民衆革命であったとする。しかし二月革命の英雄ケレンスキーは戦争をやめることができず、十月革命は二月革命に表れた労働者・兵士の革命のユートピアの高まりの頂点で起こった出来事であり、世界戦争の終結を願ったが実現できず、しかし軍隊の民主化を徹底的に実現し、二月革命で始まった反戦反軍・平和の革命を完成するものであったとみなしている。渋谷謙次郎「書評：和田春樹『ロシア革命：ペトログラード1917年2月』」、『週刊読書人』2019年2月8日号（第3276号）<https://dokushojin.com/article.html?i=4978>

意を呼び起こし、たたきつぶしてやりたいという気持ちにもさせる。⁽³³⁾

クルイモフは、兵士達が無力なのではなく反対に自信と力を自覚していることを感じ取っているのだが、であるがゆえに、そうした力が、兵士とコミサールのクルイモフとの関係をよそよそしく、時には敵対的なものになっているのではないかと考えざるを得なくなる。そうかと思うと、クルイモフの傍らにいた老人は、「同志コミサール、共産主義の下では誰もが必要に応じて取ると言われているが、誰もが、とくに朝から、必要に応じてみんな酔っ払うということになったら、どういうことになるのかね」と真面目に質問する。また負傷した兵士は、クルイモフに「ところでコルホーズについてですが、同志コミサール、戦後は廃止したらどうですか」という。⁽³⁴⁾

こうしたやりとりの一部始終を見ていたのが、クルイモフに随伴していた「第6号棟第1フラット」の住宅管理人で大尉のグレーコフである。「第6号棟第1フラット」(шесть дробь один)とは、ドイツ軍の攻撃から長期間持ちこたえた市内の四階建ての建物で、実在した「パブロフの家」がモデルになっていると言われてい⁽³⁵⁾る。いわば抵抗の象徴として伝説化された拠点である。クルイモフは、ドイツ軍の包囲がせまる中、この「第6号棟第1フラット」に潜入し、前述のような種々の反応に出くわすのである。

ところが、グレーコフは、老人の質問に笑い、コルホーズの廃止をもちかける兵士の質問に対して、叱責するどころか「悪くないテーマだ」とも言う。⁽³⁶⁾

するとクルイモフは、再び硬直したコミサール型の応答をする。「私は軍コミサールだ。私はあなた方の許しがたいパルチザン的問題行動を克服・排除するためにやってきたのだ」と。ところが、グレーコフは動じる様子がない。「さあ、克服排除してみてください」。コミサールのクルイモフが、「問題行動・発

(33) Гроссман. Жизнь и судьба. С.1034. 齋藤訳『人生と運命2』169頁。

(34) Там же, С.1035. 同上、169頁。

(35) 齋藤訳『人生と運命1』82頁の原註訳ほか、ロシア語のインターネットサイト上でも、同様な解説がしばしば見受けられる。

(36) Гроссман. Жизнь и судьба. С.1035. 齋藤訳『人生と運命2』169頁。

言」を上層部に報告すれば、告発された者は懲罰部隊送りということもあり得るだろうし、深刻な反ソ的言動とみなされれば軍法会議で銃殺刑の宣告を受けかねない。クルイモフは、さしあたりグレーコフを指揮官のポストから解任しなければならないと思うにいたるが、それでも、グレーコフを単に切って捨てるというのではなく、「話をしよう」と持ちかける⁽³⁷⁾。

「さあ、グレーコフ、真面目かつざっくばらんに話をしよう。あなたは何を望んでいるのかね。」

グレーコフは素早く、下から上へと——グレーコフは腰を下ろしていたが、クルイモフは立っていた——彼を見て、陽気に言った。

「自由が欲しい。そのために戦っている」

「われわれ全員が欲している」

「やめてくれ」グレーコフは、よしてくれと言うように手を振った。「なんだってそれがあなたに？あなたはドイツ軍をやっつけられれば、それでいいのだろう」

「冗談はやめてくれ、同志グレーコフ。なぜあなたは何人かの兵士の誤った政治的発言をやめさせないのかね、どうしてかね。あなたの権威で、あなたはどんなコミサールにも負けにくいくらいにそれができるはずだ。だが私には、兵士が失言を繰り返し、あなたのほうを見てはあなたからよしよしと言われるのを期待しているという印象がある。コルホーズに関する発言をした男、あれがそうだ。なぜあなたはあの男を支持したのかね。私はあなたに率直に言う、一緒にこうした事柄を是正しよう。もし、そう望まないなら、私はあなたに同じように率直に言う、冗談を言うつもりはない、と」

「コルホーズに関しては、それがいったいどうだと言うんですか。実際、コルホーズを好いている人なんていませんよ。あなたは私に劣らずそれをご存知でしょう。」

(37) Там же, С.1035. 同上、169-170頁。

「あなたは、なにかね、グレーコフ、歴史の歩みを変えようというのかね」

「じゃあ、あなたは、あらゆるものを古い路線に戻したいのですか」

「《あらゆるもの》とは何のことかね」

「あらゆるものです。全面的な強制労働のことです。」

グレーコフは笑いながら、言葉を吐き捨てるようにけだるそうな声で言った。不意にちょっと腰を浮かした。

「同志コミサル、たくさんです。私に他意はありません。私はこうやってあなたをちょっと怒らせてみているだけです。あなたと同じソヴィエトの人間です。信じてもらえないので腹を立てているのです」

「それなら、グレーコフ、冗談は止めよう。どうやって良からぬ非ソヴィエト的な悪い心を取り除くか、ちょっと真面目に話をしよう。あなたがそれを生み出したのだ。私がそれをやつけるのを手伝ってくれ。だってあなたはこれからも栄光とともに戦うことになるのだから。」⁽³⁸⁾

「自由のためにたたかっている」という大義は、クルイモフとグレーコフとの間で共通しているかのようだが、両者は「自由」をめぐって、そりが合っていない。とりわけ「コルホーズ」（全面的農業集団化）の存否をめぐる両者の溝は埋めがたい。それでもグレーコフは、コミサールのクルイモフに対して、表面的な敬意ゆえか、自分が「あなたと同じソヴィエトの人間です」ともいうが、クルイモフは、「非ソヴィエト的な悪い心を取り除く」と、まるで「人民の敵」を摘発するがごとくスターリン主義的言説に接近する。ところが、ことスターリングラードでは、そうした「脅し」すらもはや通用していないようである。グレーコフは、クルイモフに「あなたは悩んでおられる」という意味深な言葉を残すが、クルイモフは唐突にそう言われて、単に当惑するだけである。⁽³⁹⁾

(38) Там же, С.1035-1036. 同上、170-171頁。

(39) Там же, С.1036. 同上、172頁。

グレーコフに対して、時には居丈高な態度をとるクルイモフも、革命時代の「自由」な空気を呼吸しているつもりであり、「1937年に拔擢された」人々と自分は似ても似つかぬと自認している。その分、兵士達やグレーコフの予想外の反応に傷付けられているのである。

スターリングラードでは、兵士たちとの連帯感が、親近感が、次第に強まってきていた。スターリングラードでは楽に息をすることができた。あそこには、私に対する冷淡で無関心な眼差しなどなかった。《第6号棟第1号フラット》の家へ着いたら、ますます強くレーニンの息吹を感じることになる、そんな気がしていたのに、そこに到着するとすぐに嘲笑するような悪意を感じた。そして、自分もいらだち、兵士をどやしたり脅したりするようになった。⁽⁴⁰⁾

そうこうしているうちに、クルイモフは、「第6号棟第1フラット」で夜、寝ている間に、ドイツ軍の砲撃による流れ弾で頭を負傷し、担架で運び出され、スターリングラードの（ヴォルガ川）左岸の軍病院への入院を余儀なくされる。その過程で、クルイモフは、実は負傷したのはドイツ軍による砲撃の結果ではなく、夜寝ている間にグレーコフが自分を撃ったからだという疑惑を強め、激しい怒りを覚える。退院後、クルイモフは、スターリングラード方面軍の党政治指導本部に報告書を提出するが、そこでグレーコフが自己の指揮下にある部隊を墮落させ、政治的に混乱させてテロ行為を行った、すなわち党代表である軍コミサールを撃ったという記載をした。⁽⁴¹⁾

しかし、「あなたは悩んでおられる」というグレーコフの思わせぶりなセリフが妥当しているのか、クルイモフの中でのグレーコフに対する怒りや敵意は必ずしも一貫したものではなかった。その際、「ポリシェヴィキ・レーニン

(40) Там же, С.1107. 同上、304頁。

(41) Там же, С.1107. 同上、305頁。

主義者」を自負するクルイモフの脳裏を常にかすめるのが、やはり「1937年」の禍根である。彼は、「レーニンとともに戦った古参の闘志たちを容赦しなかった」スターリンを、内心、レーニン主義を踏みにじったと感じているからである。⁽⁴²⁾

あのような過酷さでレーニンの党の党员たちを制裁するなんてことが考えられるだろうか。合法的なのだろうか。こんどはグレーコフが隊列の前で銃殺されることになるだろう。味方を撃つのは恐ろしいことだ。でも、グレーコフは味方ではない、敵なのだ。⁽⁴³⁾

「グレーコフは敵だ」と自分に言い聞かせておきながら、クルイモフはすでに動揺しており、時には敵意が後退してしまう。

ところが、ほどなくして、グレーコフがドイツ軍の攻撃で部隊もろとも死亡したという知らせが届き、結局、クルイモフによるグレーコフに関する報告事案は不発に終わる。それどころか、「殉死」したグレーコフを「ソヴィエト連邦英雄」とするように軍司令官から上申されている最中であることを聞いたクルイモフは、もしグレーコフが生きていたら、自分の報告でグレーコフが軍法会議にかけられて銃殺されかねなかったことを想像し、複雑な心境に陥る。⁽⁴⁴⁾

敵軍との戦闘で非業の死を遂げれば「ソヴィエト連邦英雄」、生きていれば軍法会議にかけられ銃殺というのは、運命のいたずら以外のなにものでもないだろう。

ただ、グレーコフは、先述の通り、実際にドイツ軍の攻撃を受けて死亡する直前まで、コミサールのクルイモフを恐れてはいなかった。もし自分の「素行」がしかるべき上層部に報告されたら、致命的な結果になりかねないことを当然、承知していたであろう。思考においては、グレーコフのほうが、ある意味

(42) Там же, С.1107. 同上、306頁。

(43) Там же, С.1107. 同上、306頁。

(44) Там же, С.1108-1109. 同上、308頁。

で「自由」であると同時に、自らの処遇を運命に委ねる度量さえをもみせている。しかも、グレーコフは、ひるむことなくクルイモフに「あなたは悩んでおられる」と見透かしたようなことまで言う。「自由」を望むことの代償として、自らを運命に差し出しているのがグレーコフである。

他方、クルイモフは「パルチザン的問題行動を克服・排除」といった毅然とした態度でグレーコフに警告しつつも、内心、「1937年」の禍根ゆえに敵と味方との境界に常に悩み、動揺してきた。そうであるがゆえに、クルイモフも、グレーコフとはまた違った立場ではあるものの、コミサールとしての生殺与奪の権限をなかば手中におさめながらも、自分の報告によって人の運命を決してしまうことについて万全ではなく、ある意味で「自由」の領域に片足を突っ込んでいるのである。

4. ルビャンカにて：元チェキストとの対話

ところがクルイモフは、スターリングラードの防衛戦の最終局面においてドイツに雇われたスパイという嫌疑で方面軍特務部に逮捕されてしまう。かつてクルイモフがコミンテルンに勤務した際のドイツ共産主義者との関係などが予審官によって追及される。むろんクルイモフ本人にとっては逮捕とスパイの嫌疑は青天の霹靂であり、身に覚えのないことである。この時に彼が感じた「自由の剥奪」感とは、「ドイツ軍の装甲師団よりもずっと強いものが自分にどつと襲い掛かってきた」かのような感覚であった。そして尋問した軍の中佐がクルイモフを殴りつけると、「憲兵にも、メンシェヴィキにも、自分が尋問を行ったナチの親衛隊将校にも、感じたことがなかった」憎悪を覚える。党から派遣されたコミサールから一気に虫けら同然にまで転落したクルイモフは、最寄りの飛行場からモスクワのルビャンカに連行される。「いったい誰が私をぶち込んだのか」と、彼の頭の中には走馬燈のように過去の出来事が現れては消える。

(45) Там же, С.1192. 齋藤訳『人生と運命3』6-7頁。

「誰が自分を密告したのか。」

こうした被害妄想に囚われ続ける一方、ルビャンカの建物に着いた時からクルイモフには「新しい感覚」が生まれてくる。この新しい感覚とは彼が「自己を見失ったことにより生じたもの」であり、それはもはやかつての確信的な共産主義者として、周囲の労働者や党员、友人からも身振り手振りの点で抜きん出ていたコミサールの「同志クルイモフ」とは違っていた。彼は、監房の中で三人の人間と出会う。これらの人間が良い人間なのか悪い人間なのか、自分に敵意があるのか無関心なのかわからなかったが、自分に発せられてくるものは「人間的」なものであった⁽⁴⁶⁾という。このように、クルイモフは非人間的なルビャンカで「人間」に出会うのである。

一人目はかつてクルイモフ自身がモスクワの劇場で目にしたことのあった有名な司会者カツェネレンボーゲンであり、ただし彼の前歴は「チェキスト」のそれ、すなわちゼルジンスキーの反革命・怠業・投機取締非常委員会、ヤゴダの合同国家政治保安部、エジョフの内務人民委員部、ペリヤの国家保安省といった歴代の保安・政治警察畑であった（「チェキスト」とは、初代の非常委員会の略称チェーカーに由来し、これらの組織の要員を意味するジャーゴンである）。二人目は元メンシェヴィキの老人ドレーリングであり、すでに二十年以上、監獄やラーゲリを転々としてきた。三人目のボゴレーエフは、芸術史家、詩人であり、美術品の鑑定家であった。

なかでもクルイモフが興味を覚えたのは、ほかならぬ元チェキストのカツェネレンボーゲンである。彼は聡明で冗談を言い無駄口をたたくが、その目は、クルイモフには「すべてを知りつくしている人々に、生きることに疲れ、死を⁽⁴⁷⁾恐れていない人々に、よく見られる」ものと映った。カツェネレンボーゲンはクルイモフに、予審官を助けてやるべきだと、まるで当局側の立場を代弁するようなことを言う。なぜなら、それは、「百時間連続の尋問というコンベヤー」

(46) Там же, С.1197-1198. 同上、15-16頁。

(47) Там же, С.1207. 同上、34頁。

に乗せられるのを回避できるからであり、結果は同じで「特別会議がお定まりの判決を出す」からであった。⁽⁴⁸⁾ 運命（判決）はあらかじめ定められているから無駄な抵抗はやめたほうがよいと言わなければならないのである。元メンシェヴィキのドレーリングは元チェキストのカツェネンボーゲンに口をすらかかないことによって抵抗の意志を示している。

このように、カツェネンボーゲンはシニカルな運命論者でもあり、「この世に罪のない者などないし、裁判にもちこめない者などいない」のであり、「令状の出される者は有罪であり、令状は誰に対しても出せる」⁽⁴⁹⁾。これは気の狂った考えというよりは、キリスト教の原罪が転倒したものとしてのスターリン主義の共同体の原罪——誰しものが潜在的に反革命であり歴史の大義に対して罪深く、逮捕された者は言い逃れなどでできず、告白（自白）しなければならぬ——を顕わにしたに過ぎない。

きわめつけは、カツェレネンボーゲンが自分自身のことを指して言っているのだと思われるが「生涯にわたって他人に令状を出してきた人間だって、御用が済めばお払い箱」⁽⁵⁰⁾ということである。ミイラ取りがミイラになることは、当時、ありふれたことであった。そしてカツェネンボーゲンは、過去、チェキストとして自ら尋問した人物をあれこれ思い出しては、時にはその人物を好意的にさえ評する。また、彼は稀覯本の収集家でもあり、自分が逮捕される直前に収集したラディーシェフの貴重書の行方を心配してもいる。⁽⁵¹⁾ ラディーシェフは、エカチェリーナ2世の時代にフランス革命と自由の息吹をロシアに入れた「インテリゲンツィヤ」の先駆けであり、当時、その著書は発禁処分とされ、「啓蒙君主」エカチェリーナからも目の敵にされたことで知られる。

(48) Там же, С.1207. 同上、35頁。

(49) Там же, С.1207. 同上、35頁。

(50) Там же, С.1207. 同上、35頁。「チェキスト」は、長官が代わると、しばしば逮捕され、またヤゴダ、エジョフ、ベリヤといった歴代「チェキスト」長官は、いずれも解任後に軍事法廷や特別法廷で死刑判決が下され処刑されている。

(51) Там же, С.1207. 同上、36頁。

カツェネレンボーゲンは明らかに知識人の素性をもった謎めいた人物だが、かといって彼はラディーシェフの「自由」の精神を受け継ぐどころか、「私が真に愛する唯一の人間はスターリン」と言って憚らない。つまり、「自由」に対しても徹底的にシニカルなのである。現に、クルイモフはカツェネレンボーゲンに興味を覚えつつも「彼はすべてを理解するが何も感じない人間らしかった。単純な概念——別離、苦悩、自由、愛、女性の貞節、悲しみ——が、彼には不可解だった」と考えている。⁽⁵²⁾ひょっとすると「真に愛するのはスターリンのみ」というのも、究極のシニシズムに他ならず、カツェネレンボーゲンにとっては、全ては無意味であり、その裏返しとしてスターリンに唯一の意味を感じ取っているかのようにふるまっているだけなのだろう。そもそも、ほとんど無作為に大量逮捕と大量処刑をノルマとして繰り返す「チェキスト」は、底なしのシニシズムなしには業務を遂行し得ず、カツェネレンボーゲンのような知識層出身の元チェキストも、18世紀のラディーシェフのような自由の闘志を「理解するが何も感じない」のだと言える。さもなければ、カツェネレンボーゲンにとって、自由とは運命という歯車を加速させてあげることである（これは現代に置き換えてみれば、自由とは市場という見えざる歯車を加速させることである、ということになろう）。

はからずもカツェネレンボーゲンと同様に「お払い箱」となってルビャンカの住人となった元コミサールのクルイモフは、この元チェキストに興味を覚えつつ、かといって感化されているわけでもないのだが、しだいに「運命」のいたずらを冷静に認識せざるを得なくなっていく。

ときどきクルイモフ自身が疑念を抱きはじめることがあった。なぜ自分はスターリンへの手紙を書きながら、こんなにも憤慨してカッカしたり、ゾツとして冷や汗だらけになったりするのか。お払い箱になってしまったのだ。だって、こうしたことは1937年に、自分と同じか自分よりもっと優れた何

(52) Там же, С.1208. 同上、36頁。

万という黨員たちに起こったことだ。お払い箱になってしまったのだ。＜密告＞という言葉が、なぜ、今、自分にはこんなにも不快なのか。それは自分自身が誰かの密告によって投獄されたからだけのことではないのか。自分だって各支帯の政治情勢広報活動員たちから政治報告を受けていた。それはざらにあることである。そう、密告はざらにあるのである。……(中略)……。とにかく、自分だって密告者なのである。方面軍政治指導本部にグレーコフについて報告したのである。もしドイツの爆弾で殺されなかったならば、グレーコフは整列した指揮官の前で銃殺されたはずである。懲罰中隊に送られた者たち、軍法会議で裁かれた者たち、特務部で尋問を受けた者たちは、何を感じ、何を考えていたのだろうか。⁽⁵³⁾

ここで、クルイモフの脳裏には何か深淵な思想が到来したわけではなく、むしろ彼はきわめてシンプルな自覚に至ったに過ぎない。「自分と同じか自分よりももっと優れた何万という黨員たちに起こったこと」。つまり、自分が当時(1937年)、逮捕されなかったのは、たまたまの運か、奇跡だったかもしれない。そして、密告される(された)のは不快であるし、許せない……でも自分もかつて報告＝密告していた、と。コミサールの肩書をもち革命以来の国際主義と階級的アプローチをとる古参の「同志クルイモフ」には、かつて、それが見えていなかった。ミイラ取りがミイラになる、密告していた者が密告される、要するに、元チェキストのカツェネンボーゲンとの対話を通じて、同様に「お払い箱になった」自己を認識したクルイモフは、スターリン主義に自己を同一化できずとも、密告の共同体の一員であったという自覚に至って、ルビャンカという運命の中継地で、心なしか自由な思考を取り戻したのであった。すでにクルイモフは、スターリングラードで、自由の領域に片足を突っ込んでいたものの——グレーコフを完全に敵視できなかった——ルビャンカでそこから一步前進したようである。

(53) Там же, С.1208. 同上、37頁。

実は、クルイモフは逮捕される直前に、スターリングラードでの革命記念日の際に、再び1937年前後に粛清された人々思い出し、「なぜ彼らは罪を認めたりするのか」という問いを反芻するとともに、ひるがえって「なれば、なぜ自分（クルイモフ）は黙っているのか」と自らに問いかけている。

自分が黙っているのは、こう言うだけの強さがいないからだ。「私はブハーリンが破壊分子、殺人者、秘密工作員であるとは信じられません」。だが、自分は評決の際に手を挙げた。その後、署名した。その後、演説をし、論文を書いた。ああした自分の熱情は自分自身には真正なものに思える。では、そういう時に、自分の疑念や動揺は、いったいどこにいつているのか。これはどういうことなのか。意識が二つある人間なのか。あるいは、これは異なる二人の人間で、それぞれ自分の、互いに似ていない意識をもっているということなのか。どう理解したらいいのか。しかしこうしたことは自分⁽⁵⁴⁾にばかりでなく、どんな人にも、いつでも、どこでも見られることである。

クルイモフは内心スターリンを心地よく思わず、「1937年」をトラウマのようにさえ思ってきたが、自分もまた当時のブハーリンの粛清に、間接的ではあれ、手を貸していたという意識が生じている。加えて、クルイモフは、グレーコフの「パルチザン的問題行動」を党政治指導本部に報告しておきながら、今や「グレーコフは多くの人々がひそかに感じていることを言葉にした。放っておかれ、ほこりをかぶってはいるが、私を不安にさせ、関心を呼び、ときに惹きつけずにおかないことを、口に出して言ったのである」と思う⁽⁵⁵⁾にいたる。グレーコフのことをいったんは「敵だ」と言ったものの、結局、ここでは、敵と味方との境界は溶解している。

このように、クルイモフがスターリングラードにおいて「自由」の領域に足

(54) Там же, С.1119. 齋藤訳『人生と運命2』328-329頁。

(55) Там же, С.1119. 同上、328-329頁。

を踏み出しつつあったのに対し、一足先にルビヤンカの住人となっていた古参のチェキストのカツェネレンボーゲンは、むしろ一貫して「自由の克服」というべき社会工学的なユートピアを抱いている。というのも、彼は有能なチェキストとして単に捜査、尋問に携わったのみならず、ラーゲリ（収容所）建設にも一時期従事していたからであった（ラーゲリの管理もまた内務人民委員部の管轄であった）。カツェネレンボーゲンにとって、「自由」とは原始人の考え方に他ならない。

現実のソ連のラーゲリの環境は劣悪であり、「監獄」の域を出るものではない。にもかかわらずカツェネレンボーゲンは、ラーゲリの有刺鉄線の内側と外側との対立をなくし、「ラーゲリが自ら姿を消して村や町の生活と融合する」ことを夢見ている。それは、個人的自由の原理が優越している社会⁽⁵⁶⁾に対置されるべきものであるという。

ラーゲリの廃止はヒューマンイズムの勝利となろう。同時に、個人の自由という無秩序で原始的な先史穴居時代の原理の勝利はなくなり、その後ふたたび勢いづくことはないだろう。反対に、自由は完全に克服されるだろう。⁽⁵⁷⁾

こうした発想は、カツェネレンボーゲンの誇大妄想と済ますことも可能だが、無政府的な自由に代わるべく19世紀のカルト的社会主义思想、サン・シモンやシャルル・フーリエなどの構想を彷彿とさせる（フーリエの生産手段共有にもとづく自給自足の共同体ファランジュなど）。そうしたカルト的社会主义は、（後のマルクス主義やレーニン主義とも違って）当時すでに眼前で進行していた国家の暴力と革命の暴力とのぶつかり合いに恐れをなして、技術と科学の進歩によって、人間の欲望や生産も管理あるいは解放可能というポスト・ヒューマン的な共同体を夢見た。

(56) Там же, С.1384. 齋藤訳『人生と運命3』375頁。

(57) Там же, С.1385. 同上、376頁。

しかし他方で、カツェネレンボーゲンは、百年後にはそうしたシステムすら姿を消し、民主主義と個人の自由を生み出すだろう、といった腑に落ちないことをいう（古典的自由や民主主義は博物館に行ってしまったのではなかったか）。

結局、古参チェキストと古参コミサルとの対話も噛み合わず、クルイモフはいう。

あなたの考えは間違いじみている。そこには革命の魂と心がない。長いこと精神科の病院で働いてきた精神科医は気がおかしくなるといふ。失礼だが、あなたが逮捕されたのは、やはり理由なしとしないね。同志カツェネレンボーゲン、あなたは保安機関に神としての属性を与えようとしている。あなたは実際、更迭されるべき時だったのさ。⁽⁵⁸⁾

長年、政治犯を尋問し、ラーゲリの運用と管理にも携わってきたチェキストが、今や、急進的になり過ぎて出身母体からお払い箱になったということだろう（法律学でいうと等価原理や応報原理、責任主義などの発想をすべて洗い流して、各則規定なき急進的な刑法草案を作ってお払い箱になってしまったクルイレンコを彷彿とさせる）。

結局、「革命の魂と心」をいうクルイモフのほうが国家と革命という古典的な矛盾対立に依拠した「自由」の領域に根差しており、全知全能の保安機関がゆくゆくはラーゲリの内と外との垣根を撤廃してしまうだろうといった妄言ともとれるような社会工学的ユートピアを何ら信じていない。折しも、クルイモフはルビャンカの獄の中で、スターリングラードにおいてドイツ軍が壊滅させられたという知らせを受け、興奮状態に陥る。そしてスターリングラードに戻りたいというのである。そこに「自由」の息吹があったからなのだろう。

(58) Там же, С.1385. 同上、376頁